

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

(設立 1965 年 3 月 28 日)



ニューズレター No. 33

Internationale Heinrich-Schütz-

Gesellschaft Sektion Japan Newsletter

Nr. 33

2024 年 3 月 15 日

目次

淡野弓子 ハイน์リヒ・シュッツ合唱団・東京 50 年の軌跡 (30)	2 - 12
山下道子 会計報告	12 - 13
会員の活動報告	13 - 15
編集後記	15 - 16

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 50年の軌跡(30)

会員 淡野弓子

内容[2011年]

追悼

菅野浩和先生 1923年 6月12日—2011年1月15日

杉山 好先生 1928年12月19日—2011年9月10日

行事

- 4月11日(月) 〈受難楽の夕べ〉 リスト生誕200年記念 その1
- 5月29日(日) 日本声楽発声学会第93回
- 7月31日(日) (リスト命日) リスト生誕200年記念 その2
- 9月16日(金) H.シュッツ《宗教合唱曲集》ムシカ・ポエティカ特別公演
- 10月10日(月) 中山悌一追悼演奏会
- 11月18日(金) 〈レクイエムの集い2011〉 リスト生誕200年記念 その3
- 12月23日(日) 〈本郷教会 クリスマスコンサート2011〉

菅野浩和先生のご逝去

2011年明けの間もない1月15日、「健康が・・・」と仰ってご静養中の菅野浩和先生がお亡くなりになりました。先生は、1969年の受難節に歌ったシュッツ《マタイ受難曲》の演奏に対し、暖かいご批評をくださいました。シュッツを歌い出して半年という私たちでしたが、これから先もシュッツを歌い続けようという意志を植え付けてくださったのです。その後もずっと私たちの公演にお越しくださり、その度に励ましの言葉を戴きました。ペルトの《ヨハネ受難曲》日本初演(1990年3月16日 東京カテドラル)の折には、コンサートの冒頭で菅野浩和作曲《三つの悲歌》が武久源造のオルガンで演奏されました。この日にはアルヴォ・ペルト氏も聴きに来られ、カテドラルは溢れんばかりで記念すべき一タとなりました。天界での浄福に包まれた永遠の時を、悠々とお過ごしの方の菅野先生が、今も私たちを見守ってくださっておられるのを感じます。

さて、この年の最大の出来事は3月11日に東北地方を襲った大震災、そして福島原発の事故でした。そして、リストが生誕200年を迎えた年でもありました。当時ロマン派の作曲家たちの生誕記念年が毎年のように訪れていましたので、西洋音楽に携わる者たちには追われるような日々でしたが、ここでリストを放っておくことはできません。

リストの、表面上の華やかな生活は広く知られた事実ですが、彼には生まれながらの宗教性と科学的思考を好んだという思いがけない一面があることを知らされ、その隠されたもう一人のリストに光を当ててみたいとの思いがあったからです。リストの宗教性というこの知られざる側面が、我々の記念年行事の目標となりました。

新しいリスト像を求めて三回連続による「リスト・チクルス」を計画し、第一回は〈受難楽の夕べ〉ということで《十字架の道行》を、第二回が《キリスト》、そして第三回は《レクイエム》という大枠が決まりました。中でもオラトリオ《キリスト》は是非とも演奏したいと作品でした。しかし巨大なオーケストラと大オルガンが必要とするため、まずはホールを見つけ出さねばなりません。土日の開催を目指し、オルガン付きのホールを探したところ、唯一、新宿文化センターが見つかりました。しかしその日は7月31日(日)という夏のさなかです。不安は残りましたが、他の可能性が無かったのでここに決めました。が、なんとこの7月31日という日はリストが息を引き取

った日だったのです。それまでのためらいは勇気に変わり、この1年をリストとともに過ごそうと決心したのです。

まず迎えたのが4月11日(月)の〈受難楽の夕べ〉でした。この日のために選んだリストの作品は《十字架の道行》です。イエスがゴルゴタの丘に登る道筋には14の留がありました。リストはその留の一場面ごとに、グレゴリオ聖歌から無調までの異なる時代感覚の作曲技法を駆使し、驚くべき効果をあげています。例えば、ヴェロニカという一人の女性が傷ついたイエスの顔を拭くと、そのハンカチにイエスの顔が浮かび上がったという伝承の情景では、〈血潮したたる御頭〉のコーラルが登場し、イエスが埋葬される場面の弔歌も〈おお、悲しみよ〉というコーラルという具合です。14曲の中には純粋なオルガンソロの曲も含まれており、このオルガンのみで描写されるシーンの迫真性も只事ではありません。リストといえども、この《十字架の道行》に関しては相当に考え、苦しみながらの創作であったのではないのでしょうか。晩年の最高傑作と言われていています。2005年にはダンスを交えたシアターピースとして上演したのですが、当夜はコンサート形式で演奏しました。そこで思いがけない出来事が！

2011年4月11日(月) 19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂
リスト生誕200年記念コンサートシリーズ[I]
～新しいリスト像を求めて～ グレゴリオ聖歌から無調へ
『未来』へ向けてリストの放った槍！ 受け止めるのは『今』

〈受難楽の夕べ〉

Heinrich Schütz(1585-1672) 《Lukas-Passion》 SWV480 シュッツ 《ルカ受難曲》
ア・カペラ

福音史家	淡野太郎	イエス	浦野智行	ピラト/ ペトロ	春日保人
女中	柴田圭子	下僕 I	武藤和明	下僕 II	阪本一郎
強盗 I	依田卓	強盗 II	中村誠一	百人隊長	石塚正
合唱	ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京			指揮	淡野弓子

Franz Liszt(1811-1886) 《Via Crucis》 (1878-79) リスト 《十字架の道行》

先唱 淡野弓子 イエス 浦野智行 ピラト 春日保人 オルガン 椎名雄一郎
合唱 ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 & メンデルスゾーン・コア 指揮 淡野太郎

(ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 & メンデルスゾーン・コア)

[S] 今村ゆかり/ 梶山いづみ/ 神山直子/ 栗川三千子/ 古武沙織/ 阪本恭子/ 櫻井尚子/ 柴田圭子
巽瑞子/ 玉井千恵/ 殿広まゆみ/ 西川真理子/ 山田みどり/ 山田由紀子/ 大和美信

[A] 秋山百合子/ 石塚瑠美子/ 影山照子/ 小西久美子/ 佐藤道子/ 高梨愛子/ 武井紀子/ 田畑玲子
戸井恵子/ 中村光子/ 松井美奈子

[T] 淡野太郎/ 武藤和明/ 依田卓 [B] 石塚正/ 阪本一郎 中村誠一

午後2時、シュッツ《ルカ受難曲》の練習が始まりました。50分間立ったままの演奏です。イエス、ピラトなど単旋律の部分はグレゴリオ聖歌風のメロディですが、合唱部分はハキハキした拍節の音楽で、この2つの動きが全身のバランスを整えて行きます。

リスト《十字架の道行》にはオルガンのみで奏される場面が出てきます。以前の演出ではこの部分にダンスが入ったので人の動きに気が向いていましたが、純粋に音楽のみを聴いてみると、椎名雄一郎のレジストレーションによって、登場人物が当時着ていたであろう衣服の布地までもが見え

てくるような音彩が浮かび上がり驚いたことでした。またイエスが重い十字架に耐えかねて転ぶ場面では、その都度女声合唱がスターバト・マーテルを歌うのですが、淡野太郎の考えで、回を重ねるごとに歌手の人数を減らしていった結果、最後は今村ゆかり、柴田圭子、影山照子の三重唱となりました。我を忘れるほどの響き、哀切の極みでした。この直後、ものすごい揺れが！カテドラルの壁が落ちて来るのではと思いました。が指揮者は当然のようにオルガニストに合図を送り、ゆっくりとオルガンが鳴り始め、イエスの衣が剥がれて行く凄惨な場面に入って行きました。誰一人身じろぎもしません。群衆が「Crucifige! 十字架につけろ！」と叫びます。イエスは只一人「エリ、エリ、ラマ、アサプタニ？」と。イエス役の浦野智行の透明な声が淡々と響き、地震は収まっていました。3.11の余震だったようですが、指揮者も歌手も揺れには全く気づかなかったそうです。

今年の〈受難楽の夕べ〉は東日本大震災発生から丁度一ヶ月という日だったのです。計画を立てた時点では予想だにできなかった展開でした。大小さまざまな混乱が生じ、最初の段階では練習に集まることの出来た人の数がぐっと減ってしまったのですが、それも徐々に回復に向かいました。一番変わったのは皆の意識と集中力です。われわれもこんな声を持っていたのか、と驚かされました。

次回は7月31日(日)《キリスト》です。念のため新宿文化センターに電話してみると、今回の地震で大ホールの壁が剥落の危険にさらされているので、4月一杯は閉館、いつ直るか分からないとのこと、残念ながらこの日はキャンセル、翌年に持ち越すこととなりました。

5月29日(日) 日本声楽発声学会第93回 東京藝術大学音楽学部

研究発表：ヘルムホルツ/セディエ 理論と実践

発表者 淡野弓子

2010年の4月以来、私はエンリコ・デッレ・セディエ(Enrico delle Sedie 1822-1907)の遺した『Vocal Art』と、彼の、声の陰影のチャートについて探索を続けていたのですが、2011年冬のミネアポリス滞在中に受けたマンヨン先生のレッスンで、一大展開を迎えました。それまでに、インターネットで探し出したセディエの『Vocal Art』Part I と、ドイツから取り寄せたヘルムホルツ(Hermann von Helmholtz 1821-1894)の『音感覚論』から両者の関連を調べると、セディエのチャートはヘルムホルツと彼の共同研究者ケーニッヒ(Rudolph König 1832-1901)の音叉を用いての実験に負うところ大なることが分かりました。また、セディエの『Vocal Art』Part II もぜひ読みたいと思っていました。マンヨン先生にこの両著から理解し得たことをお話すると、先生はご自身のライブラリーからひと抱えの紙の束を持ってこられ、「全部コピーしていいですよ。あなたは私の言うことが分かる true student だから、どうか日本へ持って帰って、人々に伝えてください。」と。それは古びて崩壊寸前の『Vocal Art』Part I, Part II, Part III そして Part IV だったのです。Part I は英語、Part III はイタリア語、Part II と Part IV は各ページが縦に三等分され、伊、仏、英の三カ国語で書かれていました。この本は声楽の技法について論理的、科学的に述べられた第一級の文献で、現在アメリカの大学図書館に数えるほどしか残されていません。

研究発表では、全四巻の概要を語り、膨大なエチュードから厳選の数曲と「声の明度のチャート」を参会者にお配りして、このチャートの元となったヘルムホルツを解説しました。普段ともに発声の研究をしている多くの方がセディエの理論に驚き、共感してくださったことは嬉しい驚きでした。

実は、2010年6月半ば、ミネソタ州セント・ポールで受けたマンヨン先生のレッスンで、遂に私の長年の声に関する疑問が氷解し、頭がスッキリしたと同時にスイスイと歌えるようになったことが、この発表に至った動機でした。一番嬉しかったのは、まずは自分が歌えるようになったことで、心置きなく指揮ができるようになったことです。団員一人ひとりの声に正確な判断が下せ、より良い道のための助言が迷いなくできるようになりました。ギーベル先生から「Ich singe ではな

い。Es singt だ」との教えを受け、「歌う」の主語が非人称だと知らされたのは1990年前後でした。ここへ辿り着くのに20年かかったと言うわけです。

7月31日(日)(リスト命日) リスト生誕200年記念 その2

・・・新宿文化センターの地震被害により延期

杉山 好先生のご逝去

大きな仕事の前にはいつも飛んでもないことが起こります。9月10日(土)午後4時半過ぎ、いつもしている真珠の首飾りの糸が切れ、床に珠が一つ転がりました。瞬間「杉山先生が！」との思いがよぎり、すぐに末娘えりさんに電話しようと思ったのですが、「落ち着け」と我が心に言い聴かせ暫くじっとしていました。5時5分前ごろ電話。えりさんでした。「父が・・・The End です。」

杉山先生から受けたご恩はとても書き切れるものではありません。聖書、ドイツ語、バッハ、ニーチェ、そしてプログラムへのご寄稿などなど、それらは全て主の為に給うた御業に通じる、あるときは大道であり、また道無き道でもありました。思えば第二次安保闘争の後、駒場の東大教養学部で開かれた〈杉山バッハ・ゼミ〉『ヨハネ受難曲』の講解を通して、私は初めて音楽修辞学に出会ったのです。

8月16日(火)に病院に伺った時は、お渡しした9月16日開催予定のシュッツ《Geistliche Chormusik 1648》の招待状と「便り」「シュッツ40年の軌跡」など、細かい字をすべて読んで下さり、「ああ、元気だったら行くのにね」と仰いました。「弓子さんは幾つ?」「73歳です。」「ああ、若いね!」とにっこりされ、返り際にはVサインで送り出して下さいました。先生のお顔は1年ほど前から日に日に穏やかになられ、この世の時間の中で、時でありながら時の束縛を超越した、イエスの約束する『永遠の生命』を生きておられることがはっきりと分かりました。

9月14日(水)、近親者のみのご葬儀に参会を許され、そこで詩編121「我、山に向かいて眼を上げ」(武久源造作曲)を歌いました。「視よ、イスラエルを守る者はまどろむことも眠ることもなからん・・・」で水色のシャツを着たえりさんがサアッと音も無く走り込み、身体中で亡き父・杉山好氏に思いを寄せました。「主は汝を守るものなり。汝の右の手をおおうかげなり。」「昼は日、汝をうたず。夜は月、汝をうたじ。」この節が終る頃、彼女は居なくなっていました。歌いつつ、踊りつつ、時なき時を共に過ごすことが出来ました。えりさんは葬儀のあとで、「過去世も今も未来も一つだと思う」と言いました。

リストのオラトリオ『キリスト』の延期に伴い、状況に相応しい音楽は?と思い巡らした結果、真っ先に浮かんだのはシュッツの『宗教合唱曲集 1648年』でした。健康に生きたい、との当たり前の気持ちにいきなり襲いかかった放射能の恐怖! 私たちは、本物の空気と水を求めると同時に「本当の言葉」を欲したのでした。シュッツのダイナミックな聖書解釈、そしてイエスへの信頼から生まれた音と言葉、それらが振動となって私たちに作用するとき、枯渇した精神は甦り、疲れた身体は立ち直るのです。以下は当夜のプログラムに記したものです。少々長いですが、当時の記録としてそのまま引用することをお許しください。

危機を超えて

《Geistliche Chormusik 1648》 Heinrich Schütz (1585-1672)

《宗教合唱曲集 1648年》 ハインリヒ・シュッツ

今回の公演は、3.11に始まり今も続く地の揺れの中で、シュッツ《宗教合唱曲集 1648年》が鳴り響く時は今、との確信から実現したものである。

バッハの《ロ短調ミサ曲》が彼の遺言とすれば、シュッツの《宗教合唱曲集 1648》もまた遺言的性格を多分に持った作品集といえよう。シュッツは30年戦争(1618-1648)のさなか、またそれ以前から折に触れて書いたモテットの中から29曲を自ら選び、《Geistliche Chormusik》として30年戦争終結の1648年、ライプツィヒの市参事会と聖トーマス教会聖歌隊に献呈した。

「善意の読者へ」と題された序文でシュッツが強調しているのは、徒に当世風(イタリアから入って来た通奏低音付きの協奏風のスタイル)に走らず、通奏低音を伴わないスタイルを十分に学ぶべし、であった。通奏低音抜きスタイルとは、鍵盤と低音楽器によるバスの支えなしに、全声部が独立した動きで進むポリフォニックな曲を指し、そのような曲を作曲するにあたっては、「各旋法の性質」「単純フーガ」「複合フーガ」「転回フーガ」「二重対位法」「さまざまな音楽技法におけるスタイルの差異」「転調」「主題の連結」などなどを作曲における必要不可欠な技法として身につけよ、と語っている。

シュッツは、通奏低音に頼らない作曲法を「固い木の実」に喩え、これをしっかり噛み締めよ、と述べるに留まらず、彼自身この方法でもう一度作曲し、それを若い後進のために出版しようと思ったと述べ、このようなスタイルの教会音楽を「ガイストリヘ・コーアムジーク」と呼ぶ、と言っている。そのようないきさつで世に出されたのがこの《Geistliche Chormusik 1648》であった。

これらのことを歌手の実技実践に当て嵌めるなら、どんなに困難でも、シュッツの言う古様式のモテットを、楽器の助け無しに歌うことを基本に据えない限り、真の意味での音の秘密、声の奥義には到達しない、ということだろう。そして《Geistliche Chormusik (宗教合唱曲集)》を演奏する場合、基本的にはア・カペラで、ということになる。

1968年のシュッツ合唱団創立以来、「ガイストリヘ・コーアムジーク」は常に私たちと共にあった。なんといってもここには学ぶことがぎっしりと詰まっていた。音楽ばかりでなく歌詞として用いられたルター訳の旧・新約聖書の言葉も日々の糧となった。シュッツの時代からすでに400年が経過し、音楽のスタイルも内容もこの世における位置や在り方もすっかり変わったとはいえ、シュッツ音楽の新鮮さは全く失われていない。今私たちに必要な音楽として機能する。理由はいろいろあるだろう。

教会旋法で書かれているため、身体への伝わり方が柔らかく、病的なものを正す力がある。ポリフォニーという形式の中で、誰もが主体であることを実感する。低音密集和音がより多くの可聴倍音の発生を促し、一瞬にして永遠といった感覚を体感させる。心地よく肌に優しいイタリア風の優しい旋律と、あつと言う間に脳を目覚めさせるキツパリとしたドイツ語のトゥッティが絶妙なバランスで交代し心身を活性化する・・・などなど挙げればきりのない善きことの数々である。

これらのモテットによって知らされた発声の方法、言葉の扱い方、和音の組み立て方、音画の解釈、文章の修辭学的解釈など合唱をして行く上で必要な多くの技術は、バッハはいうに及ばず、古典派、ロマン派、近代、現代のドイツ音楽を理解し演奏する上で、すべてが有効に働いた。バッハの《平均律》第1巻の最後のフーガのテーマには12音すべてが出現するが、その100年前のシュッツが示したドイツ語と音型の関係は、ドイツ・リート領域は無論のこと、シェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》のシュプレヒ・シュティンメに至っても、変ることの無い原則として脈々と作動している。

作曲におけるこのような原則の力は、演奏者の求める演奏技術にも大きく影響する。数年で出来るような浅い技術、首から上だけの声などは風の前の塵に等しい。シュッツが当世風の作曲技法に対して厳しい批判を展開したように、声についても性根の座った学びと修練、そして実践が必要であろう。

29曲のモテットは1-12が5声、13-24が6声、25-29が7声で書かれている。24、26-29の5曲には歌詞のついていないパートがあり、声と器楽を重複せずに分けて演奏するように指示されている。これらはどの声部も独立した動きなので、器楽が伴奏というわけではない。楽器の選択、各パートの声と器楽の組み合わせ方も基本的には自由である。今回はバロック・ヴァイオリン、バ

ロック・ヴィオラ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・チェロ、バス・ド・ヴィオロン、ヴィオローネの弦楽器にバロック・トロンボーン3本を用い、曲の内容と性質によって楽器の組み合わせを考慮した。ピッチは当時の $a' = 466$ （コーア・トーン）で演奏する。

手許にある楽譜は1648年の初版(各パート毎)、フィリップ・シュピッタ校訂による1889年のブライトコプフ版(旧シュッツ全集)、クルト・トーマス校訂による1930年のブライトコプフ版、ヴァイルヘルム・カムラー校訂1935年ベールンライター版(新シュッツ全集)、そして2006年にベールンライターが新シュッツ全集中で再度出版したヴェルナー・ブライク校訂の版である。この五種の楽譜はそれぞれに特徴がはっきりしている。シュッツ自身の序文はもとより、シュピッタ、トーマス、カムラー、ブライクらの校訂に際しての解説文もそれぞれに興味深く逐一ご紹介したいほどであるが、ここでは触れない。

今回合唱団員が手にしているのは、2006年のベールンライター版であるが、ここに使われている現代のドイツ語については、ルターとシュッツの精神を尊重し初版を参考にした。

29曲の演奏順序であるが、今回は3.11による多くの犠牲者に哀悼の気持ちをお伝えしたいとの気持ちから、〈亡き方々を悼んで〉と題された8曲から始めたい。続いて〈平和を願って〉の5曲、休憩を挟んで〈救い主を待ち、降誕を祝う〉では心も躍るクリスマス曲の数々を、そして最後の〈イエスは語る〉では、イエスが自ら語った言葉による6曲を歌う。

長年にわたり、楽器のこと、ピッチのこと、時代との関係、そして今、そしてこれから・・・などなど様々なことを共に考えて下さった研究熱心な器楽奏者の方々、40数年を共に歩み、あらゆる実験に耐え、厳しい演奏の現場に共に立ってくれたシュッツ合唱団・東京の歌手たち、そして今日、ここに集って下さった皆様の深いお心に、言葉にならぬ感謝を捧げます。これらの曲がこれから生きて行く者たちへの善き力として働きますように。

2011年9月16日 淡野弓子

2011年9月16日(月) 18:30 東京カテドラル聖マリア大聖堂

ムシカ・ポエティカ特別公演 危機を超えて 宗教合唱曲集 全29曲 ハイน์リヒ・シュッツ
GEISTLICHE CHORMUSIK 1648 HEINRICH SCHÜTZ

淡野弓子 指揮 ハイน์リヒ・シュッツ合唱団・東京

バロック・ヴァイオリン 渡邊慶子 ヴィオラ・ダ・ガンバ 福沢宏/ 中野哲也

バロック・チェロ/ バス・ド・ヴィオロン 西澤央子

バロック・トロンボーン 萩谷克己/ 宮下宣子/ 巻島俊明 ドゥルツィアン 淡野太郎

ハイน์リヒ・シュッツ合唱団・東京

[SI] 今村ゆかり/ 神山直子/ 古武沙織/ 阪本恭子/ 巽瑞子/ 玉井千恵/ 細川好子

[SII] 柴田圭子/ 武井紀子/ 西川真理子/ 松井美奈子/ 山田みどり/ 山田由紀子/ 大和美信

[A] 秋山百合子/ 石塚瑠美子/ 影山照子/ 小西久美子/ 佐藤道子/ 田畑玲子/ 中村光子

[TI] 大森雄治/ 武藤和明/ 依田卓 [TII] 淡野太郎/ 藤本桂太/ 山田明生

[B] 石塚正/ 阪本一郎/ 中村誠一/ 細川裕介

コンサート「危機を超えて」シュッツ作曲《ガイストリヘ・コーアムジーク 1648》は特にこの曲には特別の思い入れのあるお客様方の暖かい心に囲まれ無事終了しました。当夜は特に、各曲のテキストの語り手、詠み手の個人性を大切に表現を心がけました。ヤコブ、イザヤ、ヨブ、ダビデ、黙示録のヨハネ、洗礼者ヨハネ、パウロ、そしてイエス・キリスト、さらにコラルの歌詞作者ルター、プロイセンのアルブレヒト、シャリングなどなど、その都度これらの人物に成り切って次から次へと歌うということは、下手なオペラより大変な仕事でしたが、面白くもありました。

なによりシュッツがこれらの人物の本質を良く捉えているのに感心しました。演劇作家シュッツを再確認した次第です。

2011年10月10日(月)19:00 東京文化会館小ホール
(中山悌一追悼演奏会)

中山先生の薫陶を受けた老練の音楽家総勢22名の方々 伊原直子、後藤基裕、蜂谷幸枝、勝部太、渡部せつ子、福田圭位子、高橋啓三、日比吉子、鹿野道男、吉江忠男、渡邊明、宮原卓也、佐伯勝巳、佐藤信子、原口隆一、佐藤征一郎、中山節子、渡辺一男、高折續、飯山恵巳子、岡崎實俊、高橋大海。

ピアニスト：森島英子、後藤れい子、砂原悟、笈沼甲子、武田真理、赤塚太郎、小林道夫、宮城令子、山内三代子、高須亜紀子、福土恵子、佐藤恵 がそれぞれドイツ・リートを1曲、あるいは2曲歌うというコンサート、考えてみれば随分贅沢な催しでした。シュッツ合唱団の軌跡になぜこのコンサートのことを、と怪訝に思われる方もおられるでしょう。しかし私にとってははかり重要な一夜でしたので、敢えて感想を記します。

これだけの錚々たる面々が、幾千の歌曲の中から一曲選んで歌う、という趣向にも魅かれましたが、中山悌一の師がゲルハルト・ヒュッシュ(Gerhard Hüsch 1901-1984)であることに興味がありました。ヒュッシュはハンス・エムゲ(Hans Emge)という音楽教師に学び、このエムゲはセディエの直弟子なのです。ヒュッシュは1970年の終わりから80年にかけて多くのアメリカの大学で教えており、セディエのチャートを生徒に手渡しているのです。私の師匠エリザベート・マンヨン(Elizabeth Mannion)女史もチャートはヒュッシュから貰った、と。日本滞在中(1950年代)にも彼は生徒にセディエのメソッドを教えたのだろうか？ アメリカ滞在は日本滞在時から20年程後なので、日本でこのチャートを貰った生徒はひょっとしていないのかもしれないし、いるのかも知れない・・・直伝でセディエが継承されたとすれば、中山悌一はセディエの曾孫弟子、そしてここで聴くのはセディエ玄孫弟子の声。

ヒュッシュも偉大なら中山悌一もエクセレント、その生徒たちもなべて優秀でありましたから、私の期待した生々しいセディエ・メソッドは聴き取れなかったとはいえ、メソッドの伝承とその推移、途中でさまざまなものが混じり合い、変種が出現し、突然変異も起こる、というこの世の当然の成り行きを我が身体は受け止めることが出来たのでした。

22名の方々の歌をここで云々するというような失礼なことはとても出来ませんが、一点だけ、はっきりと分かることがありました。それは引退歌手か現役かということです。ライブをする人は楽器もライブである必要があります。どれほどの価値があろうとも、戸棚の奥の骨董品には意味がないのです。引退の是非を云々しているではありません。また、吉田秀和の語ったホロビッツの演奏とも違います。演奏は他ならぬ「今」「ここで」の世界。その人が生きて動いている状態を伝えるのが仕事だと思いました。

つくづく立派だと思った方は勿論いらっしゃいました。今から30年以上前にシュッツ合唱団のコンサートでソプラノ・ソロを歌って下さった飯山恵巳子先生は、その昔よりさらに一層洗練されたソプラノで、Joseph Marx(1882-1964)のNocturne, Waldseligkeitを歌われました。Marxの歌曲は初めて聴きましたが、上品な華やかさに溢れた魅力的な作品でした。

さてここに中山先生の遺された貴重な記録があります。雑誌『音楽之友』(1953年11月号)に掲載された「柴田陸君へ 中山悌一」と言う記事です。中山先生は師であるヒュッシュ氏に連れられてヒュッシュの師匠であるエムゲ教授を訪問します。エムゲ教授はカルーソー時代の話をされ、また文献を見せ、発声の話をされました。中山先生はこの書簡の中で、セディエの「声の明度のチャート」の説明を試みておられるのです。曰く「如何なる音高の際、如何なる母音を基礎として発声するかという表である。～略～ これは1870年イタリーで行われ、現在も全くこの基準でやられ

ているとの事。カルーソーの用いた母音の系列とほとんど同じである。」と。私は中山門下だった友人、知人にセディエのことを尋ねてみましたが、セディエもチャートも知る人はいませんでした。やはりこのチャートについてはもう一仕事せねばなりません。

死者の月、11月に入り、〈レクイエムの集い〉が巡ってきました。「リスト生誕200年記念」に3.11が重なって、例年の催しにも「特別の」意味が加わりましたので、選曲に苦しみました。後半第一曲目のマウエルスベルガー「この都のいかに凄（さび）しきさま」は震災の直後から歌おうと決めていました。

2011年11月18日(金)19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂
リスト生誕200年記念コンサートシリーズ[II]
〈レクイエムの集い2011〉

Heinrich Schütz ハインリヒ・シュッツ(1585-1672)

合唱 ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 ポジティブ・オルガン 椎名雄一郎
指揮 淡野太郎

H. シュッツ

Litania 連祷 SWV458 ソプラノ先唱+合唱+オルガン ソプラノ 淡野弓子

O Jesu, nomen dulce おおイエス、甘き御名 SWV308 テノール・ソロ+オルガン
テノール 武田正雄

Fili mi, Absalon 我が子、アブサロン SWV269 バリトン・ソロ+4サクバット+オルガン
バリトン 淡野太郎 サクバット 吉川久/ 武田美生/ 小野加奈代/ 生稲雅威

O misericordissime Jesu おお慈しみの極みなるイエスよ SWV309
テノール・ソロ+オルガン テノール ツェーガー・ファンダステーネ

Psalm 116 詩編116 わたしは主を愛する SWV51 合唱 ア・カペラ

~Pause~

Rudolf Mauersberger (1889-1971)

Wie liegt die Stadt so wüst この都のいかに^{きび}凄しきさま(エレミヤ哀歌) 合唱 ア・カペラ

Franz Liszt フランツ・リスト (1811-1886)

Requiem 《レクイエム》 男声の独唱/ 合唱、金管、ティンパニ、オルガンによる
ソロアンサンブル TI ツェーガー・ファンダステーネ TII 武田正雄

BI 淡野太郎 BII 小家一彦

金管・打楽器アンサンブル ユビキタス・バッハ

トランペット 上倉武/ 中村肇 トロンボーン 生稲雅威/ 小野加奈代 ティンパニ 鈴木力

オルガン 椎名雄一郎 合唱 ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 指揮 淡野太郎

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京

[SI] 今村ゆかり/ 神山直子/ 巽瑞子/ 玉井千恵/ 淡野弓子/ 村井あゆみ

[SII] 柴田圭子/ 武井紀子/ 西川真理子/ 松井美奈子/ 山田みどり/ 山田由紀子/ 大和美信

- [A] 秋山百合子/ 石塚瑠美子/ 影山照子/ 小西久美子/ 田畑玲子/ 中村光子/ 依田卓
[T] 大森雄治/ 武藤和明/ 門司常宏
[B] 石塚正/ 小家一彦/ 阪本一郎/ 中村誠一/ 山形明朗

シュッツ、マウエルスベルガー、そしてリストという三人の作曲家はそれぞれに非常に厳しい人生を歩きました。ハインリヒ・シュッツは33歳から63歳という働き盛りを30年戦争とともに生き、ルドルフ・マウエルスベルガーは1933年から45年までナチ政権の下で黨員として働かざるを得ず、その終結時にはドレスデンが大空襲によって壊滅します。リストも一見華やかに見えますが、彼が生涯持ち続けた宗教的求道心とその音楽を周囲は決して理解しようとはしませんでした。この稿では、曲の分析は避け、作品の背景について述べたいと思います。

シュッツの各曲については長くなりますので、モテット『詩編116』の成立の経緯などを簡単に述べます。この曲は、1616年、神の特別の恵みによって窮地を救われたイエナの収税官ブルクハルト・グロスマンがシュッツに委嘱した5声(S1, S2, A, T, B)のア・カペラ作品です。彼は、神の善き業と慈しみを讃え、感謝を表すために、なんと16人の作曲家にこの詩編116の作曲を依頼し、『冥界の恐怖と魂の平和』という題で出版(1623 イエナ)したのです。この詩編116を頼まれた他の作曲家には、ミヒャエル・プレトリウス、クリストフ・デマンチウス、ヨハン・ヘルマン・シャインらの名も見えます。

このモテットの成立は1619年ごろとされています。シュッツはこの頃、1605年に出されたモンテヴェルディのマドリガル集第5巻から大きな影響を受け、各所に音画の手法を用いており、音を聴くだけで身体の動きや心理状態をはっきりと知ることが出来ます。

マウエルスベルガーのモテット《Wie liegt die Stadt so wüst この都のいかに凄(さび)しきさま》は以前にもご紹介したかもしれませんが、2011年にとっては特別な曲でしたので触れておきます。

1945年2月13、14日の連合軍による大空襲によって、ドレスデンのクロイツ教会と合唱譜のアルキーフが爆撃を受け、そこで11人の少年歌手が亡くなります。1930年からクロイツ教会の合唱長を務めていたルドルフ・マウエルスベルガーは1945年3月30～31日、受難週の金曜日から土曜日にかけてこのモテット《Wie liegt die Stadt so wüst この都のいかに凄(さび)しきさま》を作曲しました。マウエルスベルガーはドレスデンの焼け跡をエレミア哀歌の詩行に重ね、その悲惨の極み、絶望のどん底を人の声の響きに変えたのです。終戦後初めてのクロイツ聖歌隊による夕拝が1945年8月4日、焼けこげたクロイツ教会で行われこの挽歌が初演されました。

ここに歌われているエレミアの言葉は、恐ろしいまでに2011年3月の東北の有様と酷似していました。そしてマウエルスベルガーの組み立てた音は、呆然と廃墟に佇み、声無き声で慟哭する人々を描き切っています。詩と音楽の普遍性、永遠性を感じずにはいられません。当夜は3.11に東日本を襲った大地震によってこの世の生命を失われた方々、続く第二、第三の災害によって筆舌に尽くしがたい困難に遭遇されておられる方々に、この歌を捧げました。

さて、いよいよリストの登場です。リストの華やかさは超絶技巧のピアノ曲とともに、そしてそれらを競って演奏する名手たちによって知り尽くされていると思いますが、彼自身が本来音楽に託したかったことは別にありました。

リストの玄孫で、ワグナーかリストかと言われれば、断然リストである、と明言するニケ・ワグナー(Nike Wagner 1945-)女史の語るところによれば、リストは多くの作品を遺したにも拘らず、それを研究する人が少ない、いち早く無調への道を伐り開き、特に後期の作品は当時の最先端を行くものであったが、周囲や聴衆には理解されなかった、今生きている人々が聴いてどう感じるだろうか、と語っています。

どういうわけか、時代はシェーンベルクを無調の旗手とし、リストの後期に表明されたアイデアや遺した作品は不当に無視されてきました。この日に演奏された《レクイエム》も、非常に前衛的ですが、何分にも演奏されることが稀なため、真正面から論じられることも少ないようです。

男声4声 (TI, TII, BI, BII) のソロ・アンサンブルと合唱 (TI, TII, BI, BII) が交互に歌い交わし、そこにオルガンと金管、ティムパニが加わるという編成です。リストは1声からトゥッティまでの声部を組み替えながら、その場、その時に響く音の薄さ、厚さ、透明度といったものを非常に大切に考えていたようです。

リストは早世した二人の子供、ダニエルとブランディーヌ、そして彼の母のためにこの曲を書いたとのことですが、彼の個人的な家族への思いを遥かに超え、全人類的な広がりとお行きを持った作品となりました。この《レクイエム》は彼の言う「未来へ向けて放つ槍」だったのでしょうか。今、日本で右往左往している私たちをそのまま写し出しているような場面にも出会い戦慄を覚えます。彼がパガニーニの死を悼んで語った「天才とは人間の魂に神を啓示する力である。人間を一つに結び、ひとつの共感出来る力としてみなすこと、これが芸術家に課せられた義務である。」との言葉は、そのままリストに当てはまるように思いました。

信じ難いことが次々と起こった2011年でした。それでもクリスマスがやって来ます。当時は12月23日が祝日でしたので、本郷教会のクリスマス・コンサートは毎年12月23日午後5時と決まっていた。カンタータ63番のために集まった器楽メンバー、合唱メンバー、そしてソリストたちの顔ぶれを見ると、エエッ、ひょっとしてシュッツの《クリスマスの物語》が出来るのでは？そこで急遽演奏することに。信じ難い内容のプログラムとなりました。《クリスマスの物語》は一場面ごとに声楽も器楽もアンサンブルの編成が変わるので、簡単には演奏出来ない曲の代表なのですが、一人で色んな楽器が出来る人、色んな声で歌える人が揃っていたことも幸運でした。

2011年12月23日(金・祝)19:00 本郷教会礼拝堂
本郷教会〈クリスマス・コンサート〉2011

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 & メンデルスゾーン・コア
アンサンブル・アクアリウス
ユビキタス・バッハ
指揮 淡野太郎

ハインリヒ・シュッツ《小宗教コンツェルト集》より

〈天よ、露を滴らせよ〉SWV322 アンサンブル・アクアリウス B 淡野太郎

〈おお愛する主なる神よ〉SWV287 S 大石すみ子 A 羽鳥典子 オルガン 淡野弓子

〈ごきげんようマリア〉SWV333 マリア(S) 神山直子 天使(A) 依田卓

S 西川真理子 A 影山照子 B 中川郁太郎

ホルネット 中村孝志/ 上倉武 サックバット 武田美生/ 生稲雅威 ファゴット 森本敏嗣
オルガン 石原輝子

ハインリヒ・シュッツ《クリスマスの物語》SWV435

天使(S) 大和美信/ 大石すみ子/ 淡野弓子

羊飼いたち(A 三重唱) 羽鳥典子/ 小家一彦/ 依田卓

賢者たち(T 三重唱) 依田卓/ 星野正人/ 細川裕介

祭司長たち(B 四重唱) 淡野太郎/ 山形明朝/ 小家一彦/ 中川郁太郎

ヘロデ王(B) 中川郁太郎

ホルネット/ リコーダー/ トランペット 中村孝志/ 上倉武

サクバット 武田美生/ 生稲雅威 ファゴット 森本敏嗣

ヴァイオリン 小穴晶子/ 若尾紀子/ 二宮昌世/ 大野幸 ヴィオラ 二宮かおる/ 谷口勤
チェロ 江浦仁美/ 三浦絢子 オルガン 柴田圭子
指揮： 淡野太郎

ヨハン・セバスティアン・バッハ 教会カンタータ第 63 番

《キリストの徒よ、この日を彫り刻め》[降誕祭第 1 日のためのカンタータ]

S 神山直子 A 羽鳥典子 T 細川裕介 B 山形明朗/ 小家一彦

器楽： ユビキタス・バッハ

トランペット 上倉武/ 河原哲平/ 中村孝志/ 中村肇 ティンパニ 鈴木力

オーボエ 後藤望実/ 大木務/ 福本愛子 ファゴット 森本敏嗣

ヴァイオリン I 二宮昌世/ 岡本真裕美/ 大野幸 ヴァイオリン II 小穴晶子/ 若尾紀子/
鈴木崇大

ヴィオラ 二宮かおる/ 谷口勤/ 高島麻子 チェロ 江浦仁美/ 三浦絢子

コントラバス 松永秀幸 オルガン 石原輝子

合唱： ハイブリッド・シュツツ合唱団 & メンデルスゾーン・コーア

S 神山直子/ 古武沙織/ 阪本恭子/ 柴田圭子/ 巽瑞子/ 西川真理子/ 細川好子/ 山田みどり
山田由紀子/ 大和美信

A 秋山百合子/ 石塚瑠美子/ 大島さち子/ 影山照子/ 栗川三千子/ 西久美子/ 佐藤道子
高梨愛子/ 武井紀子/ 田畑玲子/ 淡野弓子/ 戸井恵子/ 中村光子/ 松井美奈子

T 甲斐高志/ 藤本桂太/ 星野正人/ 細川裕介/ 依田卓

B 石塚正/ 小家一彦/ 五月女温/ 阪本一郎/ 中村誠一/ 山形明朗

：アンサンブル・アクアリウス

S 石井真知子/ 入山芳子/ 下島喜代子/ 田代田鶴子/ 直井道子/ 山田由紀子

A 天城素子/ 荒井敦子/ 武井紀子/ 二宮素子

指揮： 淡野太郎

主催 日本キリスト教団本郷教会 企画制作 ムシカ・ポエティカ

このプログラムは天から戴いたまことの贈り物、大荒れの年でしたが、恵みに溢れたクリスマスと共に 2011 年も暮れて行きました。(続く)

日本支部会計委員会からのご報告

会員 山下道子

いつも会計事務にご協力いただき、ありがとうございます。

I) 会計の現状について

- ・ 次号のニューズレターにて、2023 年度の会計報告と 2024 年度の中間報告をご覧いただけますが、それに先立ち以下をご報告いたします。
- ・ 2023 年春のニューズレターでお知らせしましたように、2023 年度から年会費が個人、団体ともにそれぞれ 5 ユーロ値上げされました。

さらに、急激な円安の影響を受けて、この 1 年だけでも 1 ユーロ 140 円台から 160 円台へと高騰したため、昨年度の赤字額は 5 万円程度になる見込みです。これらをそのまま支部会費に反映するな

らば、かなり大幅に値上げせねばなりません、当面はこれまでのプール金を充当し、皆さまからお預かりする額は据え置く予定です。今後の為替動向を注視していきたいと思いますが、現状にご理解いただければ幸いです。

- ・例年通り、本部に100ユーロの寄付を行いました。

II) 今年度の会費納入のお願い

年会費の納入締め切りは昨年同様、12月1日ですが、常時受け付けております。おついでの折りに、どうぞよろしくお願ひいたします。

- ・ 納入期限 2024年12月1日

- ・ 金額

個人会員 (EUR30) . . . 4,500円

学生会員 (EUR20) . . . 3,000円

団体会員 (EUR35) . . . 5,000円

- ・ 振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00170-1-9055

国際ハインリッヒ・シュッツ協会 日本支部

他の金融機関からお振り込みになる場合は、以下です。

銀行名：ゆうちょ銀行

預金種目：当座

店名：〇一九店 (ゼロイチキュー店)

口座番号：0009055

- ・ ご質問などの連絡先

会計担当 山下道子

電話・FAX 03-5497-0840

email: im-ymsht@jcom.home.ne.jp

会員の活動報告

1) 荒川恒子 (eterna@nifty.com)

2024年4月26日(金) - 28日(日) 第35回国際古楽コンクール (山梨) 開催

於: 山梨商工会議所202室、県立図書館多目的ホール、コットンクラブ、桜座

2024年4月29(月), 30日(火) 審査委員 アンネ・マリー・ドラゴジツ氏による

チェンバロ・マスターコース開催

於: 聖グレゴリオの家聖堂

<http://eterna.lolipop.jp/competition>

2) 石井 賢

バッハクライス神戸 第15回定期演奏会 (合唱への賛助出演)

2024年6月8日(土) 於: 日本キリスト教団神戸栄光教会 (開演時刻未定)

指揮: 李善銘

J.S. バッハ: 管弦楽組曲 第3番 ニ長調 BWV1068

カンタータ 第24番「まじりけなき心」 BWV24

カンタータ 第34番「おお永遠の火、おお愛の源よ」 BWV34
小ミサ曲 イ長調 BWV234

スプラアンサンブル第27回演奏会（合唱への賛助出演）

2024年6月30日（日）14時開演 於：第一生命ホール

指揮：長岡聰季

W. A. モーツァルト：レクイエム 二短調 KV. 626（レヴィン版）

C. V. スタンフォード：二重合唱のためのマニフィカト 変ロ長調 Op. 164

J. S. バッハ：カンタータ第4番「キリストは死の縄目につながれたり」 BWV4

3) 今井奈緒子（東北学院）

7月6日（土）16時開演（予定）今井奈緒子オルガンリサイタル

於：東北学院大学五橋キャンパス押川記念ホール

共演：鈴木美紀子（ソプラノ）大西敏幸（トランペット）

曲目：ニコラ・ド・グリニー 賛歌《Ave Maris Stella》

J. F. ヘンデル オルガン協奏曲（オルガンソロ版）

坂本日菜（委嘱作品）「讃歌 II」他

10月19日（土）16時開演（予定）

宗教音楽の夕べ

於：同土樋キャンパスラーハウザー記念礼拝堂

出演：中川郁太郎（指揮）宗教部聖歌隊（合唱）オルガン独奏（奏者未定）

11月9日（土）16時開演（予定）三原麻里オルガンリサイタル

於 同五橋キャンパス押川記念ホール

他ご案内としては2点です。

1. 旧教養学部泉キャンパス礼拝堂より五橋キャンパス押川記念ホールへのフランス・ケルン社オルガン移設（2022年度）に続き、2023年12月、工学部多賀城キャンパス礼拝堂より泉キャンパス（礼拝堂改め）音楽堂へのドイツ・シュツケ社のオルガン移設が完了しました。
2. 2024年度より、宗教音楽研究所所長を文学部総合人文学科教授椎名雄一郎氏へバトンタッチいたします。尚、シュツツ協会へのご連絡役は、引き続き私が務めます。

4) 淡野弓子・太郎 Musica poetica

2024年3月22日（金）19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂

ムシカ・ポエティカ発足40周年記念[I] 〈受難楽の夕べ〉

O. di Lasso 《Lagrima di S. Pietro 聖ペトロの涙》1594（遺作）ほか

ハインリヒ・シュツツ合唱団・東京 指揮 淡野弓子

[全席自由] 4000円 2500円（学）

主催 ムシカ・ポエティカ T：03-3970-0585 F：03-3998-5238

<http://www.musicapoetica.jp>

チケット 菊田音楽事務所 T&F 042-394-0543

Soli Deo Gloria★讃美と祈りの夕べ2024春～初夏

日本キリスト教団本郷教会礼拝堂 杉並区上荻4-24-5

3/31(日)18:00 バッハ・カンタータ Nr. 66
4/20(土)18:00 バッハ・カンタータ Nr. 104
5/19(日)18:00 バッハ・カンタータ Nr. 174
6/09(日)18:00 バッハ・カンタータ Nr. 20

10月18日(金) 9:00 三鷹市芸術文化センター「風のホール」
ムシカ・ポエティカ発足40周年記念[II] 〈レクイエムの集い〉
J. S. BACH 《Messe in h Moll》指揮 淡野太郎
合唱 ハイブリッド・シュツツ合唱団・東京 & メンデルスゾーン・コア
オーケストラ ユビキタス・バッハ オルガン 椎名雄一郎
[全席自由] 4000円 2500円(学)
主催 ムシカ・ポエティカ T:03-3970-0585 F:03-3998-5238
<http://www.musicapoetica.jp>
チケット 菊田音楽事務所 T&F 042-394-0543

朝日カルチャーセンター立川■ハイブリッド・シュツツ一人と音楽
其の十 《小宗教コンチェルト集》Op. 8より
～戦時下で作られた小編成のコンチェルト～ 講師 淡野弓子
2024年 4月13日(土) 5月25日(土) 6月8日(土) 10:30~12:00
朝日カルチャーセンター立川教室(JR立川駅構内 ルミネ 9F)
受講料:3回 9,999円(会員) 132999円(一般)
入会金5,500円(70歳以上は入会金無料) 設備費:495円
申し込み:朝日カルチャーセンター立川教室 042-527-6511

朝日カルチャーセンター横浜■〈宗教歌を歌う〉
バッハ・教会カンタータの世界～独唱・重唱名曲選～講師 淡野弓子
2024年 4月8日(月) 5月13日(月) 6月10日(月) 12:00~13:30
朝日カルチャーセンター横浜教室(横浜駅東口 ルミネ 8F)
受講料:3回 9,999円(会員) 入会金5,500円(70歳以上は入会金無料) 設備費:495円
申し込み:朝日カルチャーセンター横浜教室 045-453-1122

編集後記

のんびりとくつろいでいた新年は、関東でもかすかに感じられた地震での幕開けとなりました。急いでテレビをつけて能登半島であることを確認。そういえば、あちらは厳しい寒さのはず。すぐに連想ゲームのように、東北大震災の寒さを思い出していました。地震の興奮に追い討ちをかけるように、羽田空港の飛行機衝突事故。なんだか今年は気をつけねば、と気を引き締めての始まりでした。

1月10日から暫くドイツに滞在しました。向こうから届くニュースによれば、ドイツ鉄道がストをしているので、フランクフルトから動けないとのこと。さてはて思案の末、バスがあるはず。そうです。遠距離バスがありました。急いでネットでチケットを買い、準備万端。空港出口近くの駐車場発とあります。しかし時間がきても真っ暗。乗り場のマークが無く、係員もおらず。ここのどのあたりにバスが来るのやら。心配そうな顔の人々が集まってきました。定刻を1時間以上遅れ

て、ようやく見えたバスは、南方面に行く客を集めています。色々の方面行きバスが来るのか、ビックリしながら待つことしばし。ようやく自分の目的地方面行きが来ました。きつねにつままれたような不思議な感じでの乗り込みでした。こんな風に始まったドイツ生活ですが、その後も毎日鉄道、市電・バス、飛行機のストは続きます。西欧の真ん中に位置するドイツの交通網がそのような有様ということは、そこを通過する人々の生活は翻弄され続けています。それでも私の滞在中は、数日前に予告がありました。しかし今ではそれもなく突然ストとのこと。通勤、通学にも大いなる支障が生じています。ドイツを通過して移動する演奏家の方々は、急遽鉄道からチャーター・バスに乗り換え、定刻に会場入りするために、体力・気力を使い果たしているとのこと。今ではイタリアやスペインの素晴らしさ、はたまたフランス鉄道の正確さを賛美する有様なのです。何故こんな低落振りになってしまったのでしょうか、そしていつまでこの状況が続くのでしょうか。今まではストだけは回避をと考え、決行前夜には解決策を見出していた国なのです。

このようにして始まったドイツ滞在です。朝ラジオをつけて朝食を取っていると、なにやら「ヤーパン」と聞こえたように思いました。かなり長い滞在の時でも、日本のニュースはほぼゼロに近いのです。全世界的に報道すべき深刻な事件は、まず起こらないということでしょう。寂しいけれど、ありがたいことと捉えなければならぬはず。ヨーロッパの視点からみれば、目下イスラエルとガザの関係、そしてすこし背後に押しやられている感のあるウクライナとロシア問題に関しては、毎日報道すべきことが山積しています。それに比すれば、ヨーロッパの他の国々の実情は、外国に伝えるべき重要事ではないでしょう。しかし目下報道すべき事項の中で、日本の話題が断トツにトップになっているのです。ロケットの月面到着がまず大きく取り上げられました。次には世界GDPのランキングで、ドイツが日本を抜いて第3位に浮上したとのこと。しかしドイツ人の中にはあまり実感は湧かず、一応数字上では知っているといった感じです。むしろ毎週一夜を通して、日本のコミックを流すチャンネルに熱中です。料理番組では日本のチキン・ライスの作り方の紹介、美しい風景や行事の紹介等々、毎日日本の事が紹介されない日はほぼ無いといった、日本ブームです。バスの中でスマホを用いて、大声で話している方に注意する際、「それは非常に礼儀知らずで、日本では他人に対する配慮を忘れる人はいない」と注意を始めた紳士がいたのには、驚くばかり。まさに日本はあこがれの存在になっているのです。そういえば円安の煽りを受けて、外国旅行をする日本人が少なくなっている中、日本の飛行機には外国人が多く搭乗しています。日本語を熱心に学ぶ外国人が増えてもいます。どうも褒め殺しされそうです。嬉しいことですが、井の中の蛙にならないよう気を引き締めたいたいものです。(荒川恒子)

支部長 荒川恒子

TEL/FAX 045-421-0502 E-Mail eterna@nifty.com

会計 山下道子

TEL/FAX 03-5497-0840

E-Mail im-ymsht@jcom.home.ne.jp

ホームページ

<http://schuetz-jp.org/> 佐藤 望

(事務一般および様々なご質問・ご意見・情報は荒川、
会計に関することは山下へ)

ニューズレター編集 荒川恒子